

『アンクル・トムの小屋』と『アント・フィリスの小屋』

山口 ヨシ子

1 「アンクル・トム・エピソード」

『アンクル・トムの小屋』は、奴隷制廃止論者の機関紙『ナショナル・イーラ』における連載が完結する二週間前の一八五二年三月二十日に二巻本として出版されたが、その反響は連載中のそれをはるかに凌ぐものであった。アメリカ小説として「他に匹敵するものがない」ほどのベストセラーとなって「世界的な成功」(モット 一一九)をおさめたばかりでなく、その人気が小説以外の分野にまでも影響を及ぼしたことも画期的なことであった。

一八五二年の九月末までには、『リトル・エヴァ』や『アンクル・トムの嘆き』といったいわゆる「アンクル・トム・ソング」が八編も発表され、「アメリカ人は、それらの歌を弾き、歌い、涙を流した」といわれている(ウィルソン 三二四)。登場人物の絵を配したカードゲームやパズル、紙人形なども商業ベースに乗って売りだされた(モット 一一九)。たとえば、ロード・アイランド州の業者が製造した「アンクル・トムと

リトル・エヴァ」という家庭娯楽用カードゲームは、小説の内容を模して「家族の別離と再会をくり返す」ものであったという（ウィルソン 三二四―二五）。

一八五二年の夏には、ボストンのミュージアム劇場とニューヨークのナショナル劇場でそれぞれ異なった脚本で上演され、アンクル・トム劇は、やがて「アメリカ演劇史上最大のヒット」となっていく（ゴセット 二六〇）。ハリエット・ビーチャー・ストーリーが原作者として劇化に対する版權を獲得したのは一八七〇年であったが、アンクル・トムは、一八五二年の秋から一九三一年まで、「舞台を降りることは決してなかった」のである（ウィルソン 三二五）。

ストーリーの小説は、時のファッションに影響を与えることにもなった。ニューヨークの紳士たちは、ナショナル劇場でアンクル・トムの「主人」オーガスティン・セント・クレアを演じた俳優のいでたちを真似て、「セント・クレア・ハット」なるものを着用し始めたという（ハーシュ 三二六）。上流社会の女性たちは、小説のシーンがプリントされたスカーフなどを買ひ、「イライザ・ドレス」なるものが各種掲載されていた週刊新聞『ニューヨーク・イラストレイテッド・ニューズ』を好んで購読していたともいわれている（三一六―一八）。

一八五二年十二月四日付けのニューヨークの週刊新聞『リタラリー・ワールド』には、「アンクル・トム・エピソードがいまだ衰えることなく猛威をふるっている」とある。エヴァート・ダイキンクが編集していたこの新聞は、出版直後から『アンクル・トム』を「逃亡奴隷のマニユアル」にすぎないと断定するような否定的な書評を掲載していたが（モット 一二〇）、その人氣が性別、年齢、階級、国境などの壁を越え、それまでの文学の歴史にはなかった「現象」を生みだしたことに「驚異」を禁じ得なかったのだろう。小説が三十七

セント半の大衆用ペーパーバックから、五ドルのギフト用豪華版まで、消費者のニーズにあわせた版を各種用意することで「驚異的」に売りあげを伸ばしただけでなく（ハーシュ 三二六）、家庭用娯楽ゲームからファッションに至るまで、さまざまな社会現象までも引き起こし、文字どおり、その影響が「伝染病のように」広がった点でも、驚異的であったといえるだろう。⁽³⁾

『アンクル・トム』が奴隷制廃止を訴えてこれほど話題になった小説であったとき、奴隷制を推進していた南部からの反撃がいかに強かったかは容易に想像できる。州の経済が奴隷制に依存していなかったケンタッキーなど境界州における一部の例外を除けば、南部では『アンクル・トム』は「敵意」をもって受けとめられたと言ってよく（ジョーダン・レイク 六）、物語に対する南部人の「激しい怒り」を示す事件が数々報道されている（ゴセット 二二〇）。

アラバマ州モービルでは、『アンクル・トム』を陳列していた本屋が自警団に町から追いだされ、ヴァージニア大学では、学生たちによって、本が公開で焼却されている（ゴセット 二二〇―二二一）。メリーランド州のある裁判所では、奴隷制廃止を訴える他の文書とともに『アンクル・トム』を所持していた自由「黒人」に対して、十年間の禁固刑を言い渡したとさえあったという（モット 一二〇、ゴセット 二二一）。ストーのもとへは、南部から黒人の切り取られた耳が『黒んぼ野郎』を弁護することをあざける「カードを添えて送り届けられたというエピソードまである（ゴセット 二二一）。このような一連の事件は、『アンクル・トム』人気への「反撃現象」ともいえるだろう。

ストーは自分の小説に対するこのような反撃現象に対処するため、一八五三年には、『アンクル・トム』への

『手引書』を著して反論する。この本は、副題にも掲げられているように、おもに「物語が依拠した事実や証拠資料」を明らかにしようとしたものである。だが、『アンクル・トム』への批判は、それによってさらに強くなる（ゴセット 二二一）。『アンクル・トム』を最初に連載した『イーラ』紙が、連載終了後も、賛辞ばかりか、誹謗に対する作者自身の返答で発行部数を飛躍的に伸ばしたといわれているが（アダムズ 六〇、ハロルド 一四三）、『アンクル・トム』に対する批判は、作品があまりにも売れ、大きなブームを引き起こしたためにいっそう過激さを増したともいえるだろう。

『アンクル・トム』人気への反撃現象の一つとして特筆すべきは、この時期「反アンクル・トム小説」と呼ばれる作品が相次いで出版されたことである。トマス・ゴセットは、『アンクル・トム』への反撃として書かれた、いわゆる「奴隷制擁護文学」のリストを作成し、ストーリーが単行本を出版した一八五二年から南北戦争が始まる一八六一年の間に書かれた二十七編（長詩二編を含む）について、出版社や作者の出身地などを含めて記録している（四二九―三二）。

このリストにもとづいて、「反アンクル・トム小説」を作者の出身地別に区分すると、南部出身者によるものが十六編、南部に移住した北部人によるものが三編、北部出身者によるものが七編、作者の出身地不明のものが一編である（四二九―三二）。南部人、もしくは南部に移住した北部人によって書かれたものが、全体の七割を占めているのである（四二九―三二）。

『アンクル・トム』では、奴隷制がアメリカの産業資本主義経済に当然のごとく組み入れられていることが批判されているのであり、奴隷制によって支えられている南部のコットン・ビジネスに北部の資金が流れてい

る仕組みも鋭く糾弾されていることを考えれば、「反アンクル・トム小説」が北部人によって書かれたとしても不思議ではない。だが、ストーリーへの反論を明白に打ちだし、奴隷制支持を訴えた文学は、ゴセットによるリストに従えば、おもに南部から発信されたということができよう。

南部から発信されたこれらの「反アンクル・トム小説」のうち、その四割近くが女性作家によって書かれた事実にも注目すべきであろう。当時の南部には「はっきりものが言える女性文学者がたくさんいた」（パシユヴィリ 七七）といわれているが、奴隷制による性的虐待、母性愛の蹂躪、家庭の崩壊などを訴えたストーリーの物語が、少なくとも「反アンクル・トム小説」を書いた南部の女性文学者たちに強く否定されたことになるからだ。白人中産階級の女性読者層に向けて、女性が結束することによる社会変革の可能性を訴えたともいえる『アンクル・トム』に対して、南部の女性作家たちはなぜ反発し、どのように反論したのであろうか。「反アンクル・トム小説」のなかで、とくにこれらを検証することは意味があることに思う。

ジョイス・ジョーダン・レイクは、ゴセットのリストからいくつかの作品をはずすと同時に新たに数編を加え、三十二編を「反アンクル・トム小説」としているが、そのうち十一人の女性作家によって十二編が書かれたとみている（八）。十二編を同様に作者の出身地別に区分すると、五名が北部、五名が南部、一名が出身地不明となる（八）。だが、北部で生まれて南部に移住した作家を南部の範疇に加えると、ジョーダン・レイクが掲げる女性作家による「反アンクル・トム小説」も、その大半が南部関係者によって書かれたとみることができよう。

本稿では、このような「反アンクル・トム小説」のなかから、一八五二年の秋に出版されたメアリー・イー

ストマンの『アント・フィリスの小屋 ありのままの南部生活』を選び、この作品がどのように『アンクル・トム』への反論を行っているかを検証したい。ストーが北部出身の白人女性作家であったのに対して、イーストマンが南部出身の白人女性作家であったこと、『アント・フィリス』が数週間で一万八千部を売りあげ、その反響も少なくなかったと思われることが（グウィン 三八）、比較として選ぶおもしろ理由である。

2 南部人の『アンクル・トム』への関心と反発

『アント・フィリス』をはじめとする「反アンクル・トム小説」の多くが南部人によって書かれたということとは、『アンクル・トム』が南部でも広く読まれたということを示す証拠でもある。南部の新聞には、『アンクル・トム』の本を自紙で宣伝することを「怒りをもって」拒否したのもあったが、受け入れたものもあり、『アンクル・トム・エピソードミック』は南部までも確実に届いていたのである（ゴセット 二二〇）。

南部の本屋は『アンクル・トム』を公に宣伝して売ることができなかったものの、需要にはしっかりと応える姿勢をとっていたようである（ゴセット 二二〇）。乗物やホテルなど公共の場でも同様で、蒸気船の売り子は、「他の本のように声にだして」本を売ることがなかったが、『アンクル・トム』のタイトルが「他の本の間から見えるように前にだしていた」という（二二〇）。『アント・フィリス』を売っていたチャールストンのホテルのブックスタンドでは、『アンクル・トム』について尋ねた客に、「公には売れないのですが、ご用立てができます」と答えたということも、旅行者の手紙に記録されている（二二〇）。

『アンクル・トム』が南部人によく読まれていたことは、現地を訪れた新聞記者の報告記事などで、より詳しく知ることができる。たとえば、一八五三年三月四日付けの『ニューヨーク・タイムズ』紙には、『アンクル・トム』が南部でも「広く読まれている」とする記事が掲載されている。農園主に取材したというこの記者は、『アンクル・トム』が「一般的にはきわめて厳しく批判され、奴隷制の記述が激しい怒りをもって否定されている」としながらも、かつて奴隷を保有していた農園主から見た作品の「信憑性」なども詳述しつつ、作品の「人気」が南部においても密かに潜行していた様子を伝えている。

当時の南部女性が『アンクル・トム』をどう読んだかということも報道されている。一八五三年二月十一日付けの『ニューオーリンズ・ピカユーン』紙には、『アンクル・トム』とストーリーに対する南部女性の過激な批判が掲載されている。その記事によれば、『アンクル・トム』は「邪悪で意図的な嘘の連続である」という。ストーリーは南部と奴隷制を、「謙虚な女性なら思いつくこともできない」「好色の想像力を働かせて」、「きわめて悪意に満ちた嘘で表現した」と断罪してもいる。ストーリーのように「争いごとの扇動者」となって「女らしさを失う」くらいなら、南部の奴隷になった方がましだとまで言い切っているのである。

「ハリエットという男性」によって、「女性の使命」を守ることの重要性を再認識させられたとするこの南部女性の意見は、女性が「信心深く、性的に純潔、男性に従順で、家庭的である」ことを理想とする「真の女性神話」（ウェルター 一五二）が、南部の中産階級層にいかにも深く浸透していたかを示す一例といえるだろう。ストーリーの物語自体、当時の白人中産階級女性に求められた「真の女性」の価値観にもとづきつつ、そのなかで、国家の重大事にあたって女性に何ができるかをおもに女性読者に訴えたと読めるが、そのような物語を書くこ

とが、その南部女性には「女性の使命」を「違えた」行為として強く否定されたということであろう。

南部の上流階級の女性がいかに『アンクル・トム』を読んでいたかということは、メアリー・チェスナットの日記によっても知ることができる。サウスカロライナ州屈指の大農園主の妻であった彼女は、自らの日常を綴った膨大な日記を残しているが、そのなかでも『アンクル・トム』のことは頻繁に言及されている。『アンクル・トム』をまた読んだ」(三〇七)という一節もあって、厳しい批判と皮肉をもってではあるが、大勢の奴隷と身近に生活する女性としての視点から、ストーリーの人気小説を詳しく読んでいたことがうかがえるのである。

『アント・フィリス』は、『アンクル・トム』に対する南部人のこのように多様で批判的な反応が、一つの読物として具現した結果といっていいただろう。さまざまな社会現象を引き起こすほどの人気を博していた『アンクル・トム』に対して、イーストマンは、南部人として、「生まれた地域の文化」(パッシュヴィリ 七七)を知らせる使命感を感じていたのかもしれない。「ありのままの南部生活」という副題が示していたように、「ザン・パトリオットにして、ヤンキーの公然の敵」(F・C・S)として、ストーリーの描いた南部に抗う気持が強くあったのであろう。アメリカで最大の奴隷数を抱え、総人口の三割が奴隷であったというヴァージニア(スタンプ 三一一―三三二)に生まれたイーストマンであれば、そのような気持ちも起きても不思議ではないかもしれない。

たしかに、ストーリーの南部経験はきわめて限られており、そのような彼女が南部を詳細に描くことには限界があったことも事実であろう。ストーリーが黒人奴隷の実態を知らないという批判や奴隷に対する誤ったイメージを

植えつけたという批判は当初から強いが（ファーマス 五）、実際、彼女はケンタッキーの農園を数日間訪れたことがあるのみで、深南部に決して足を踏み入れることはなく、ルイジアナ州の農園の様子を書くにとどまっている（ヘドリック 一〇 二二八―一九）。情報の不足を痛感したストーリーは、元奴隷の黒人指導者フレデリック・ダグラスに、とりわけコットン・プランテーションを描くにあたって、情報提供者の紹介を依頼する手紙さえ書いているのである（ヘドリック 二 五九）。彼女が返事をもらったかどうかは不明であるが（カム 一〇〇）、「詳細にいたるまで、生き生きと実物そっくりな絵を描きたい」（ヘドリック 二 五九）と願っていたストーリーが、面識のなかったダグラスに手紙を書いて援助を求めたということは、彼女が南部を描くことにいかに腐心していたかを示す証拠ともなるだろう。

だが、「反アングル・トム小説」を書いたイーストマンが、副題そのままに「ありのままの南部生活」を描くことができたかといえば、それはストーリーが描いた南部と同様の問題を呈していると言って差し支えないだろう。先に言及した『ニューヨーク・タイムズ』の記事によれば、ある南部の農園主は、トムのような人物は存在しないし、奴隷制から生みだされることはない、と記者に語ったというが、ストーリーが自らのイデオロギーを示すために、当時の中産階級の白人女性に求められた理想を具現するかのような男性奴隷を描いたとすれば、イーストマンもその小説作法においてストーリーとあまり遠くない位置にいたといえよう。「親切な」奴隷所有者の庇護のもとで、「幸せな」生活を送る「純真で」「子どものような」奴隷たちという、イーストマンが『アント・フィリス』で描いたヴァージニアのプランテーションの様子は、やはり奴隷制を擁護する手段としての描写であって、「生き生きと実物そっくりな絵」ではない可能性が強いということにもなるだろう。

「反アンクル・トム小説」を書いた女性作家の大半は、奴隷所有者ではなかったといわれている（ジョーダン・レイク 一三）。南部には、雄弁に発言する女性作家が多かったが、奴隷制のことになると慎重に口を閉ざす傾向にあり、奴隷制を知らない作家がストーリーへの批判を書くことが多かったという（パプシュヴィリ 七七）。イーストマンの奴隷制との関わりがどの程度のものであったかは不明であるが、彼女が軍人の夫とともに赴任先のフロンティアで長年過ごしていたこと（F・C・S）を考えれば、彼女の描いたヴァージニアの農園は、神話化された姿と言っても過言ではない。たとえば、大勢の奴隷を擁する農園の女主人であったチェスナットの場合にみられるように、「私にできるのは自分で見たものによって判断することだけ」という姿勢で、ストーリーの黒人描写の浅薄さを皮肉っているのは（三〇七—〇八）、本質的に異なっているということである。

『アンクル・トム』に対して強い反対を表明していた南部作家のウィリアム・ギルモア・シムズは、「小説を社会批判の手段として使うこと」は、「芸術や議論を悪用することだ」（ゴセット 一九五）と主張していた。『アンクル・トム』が奴隷制廃止運動のプロパガンダにすぎないとする批判であるが、シムズのみならず、イーストマンなど、「反アンクル・トム小説」を書いた作家は奴隷制を擁護するために小説を書いたわけであり、シムズのストーリー批判をそのまま逆の主張で実践したことになる。『アント・フィリス』では、「私たちは世界を改革するために協会を作り、奴隷制についての本を書く」と、その意図が明言されている。『アンクル・トム』と「反アンクル・トム小説」は、実際の戦争が始まる十年近く前から、文学上でいわば南北戦争をくり広げていたともいえるだろう。

3 奴隸制擁護論の根拠

『アンクル・トム』では、奴隸制を「悪魔の産物」と規定し、「奴隸制によって金儲けをする農園主たち、彼らを喜ばせる聖職者たち、奴隸制によって支配しようとする政治家たち」が、巧妙に論理をねじ曲げて、体裁よく仕立てあげたものとしている。奴隸制そのものが唯一の敵とみなされ、それに翻弄される人間すべてが被害者として描かれているが、奴隸制の不条理さが南部紳士のセント・クレアによって語られているところに意味がある。世襲によって大勢の奴隸を保有することになったニューオーリンズの富裕な農園主もまた、深き悩みを抱える奴隸制の被害者であるというメッセージさえ可能になるからだ。

だが、このようなメッセージこそが、奴隸制を擁護する立場にあった南部人の怒りを買ったと言ってよい。奴隸制擁護論は、自らの富と権力を守ろうとした、政治家をも兼ねる南部の富裕な農園主層にも推進されたといえるが、『アンクル・トム』では、その農園主が作者の意見を代弁して奴隸制廃止論を展開するばかりでなく、奴隸制の被害者としてすら描かれているからだ。

「反アンクル・トム小説」は、そのおもな特徴が、奴隸制の問題を「あたかも聖書と憲法を精読すれば十分に正当化できるかのように」扱っているところにあるという（ゴセット 一二三）。セント・クレアが、結託して仕立てあげたと主張する、聖職者、政治家、農園主などの観点から奴隸制を正当化していたことになるわけだ。この点ではイーストマンも同様の手段に拠っているといえよう。

『アント・フィリス』では、その長い「序文」において、「奴隷制が神によって正当と認められている」とする論理が展開されている。「創世記」九章の数節を引き合いにだし、「いかなるクリスチャンも、これらの節を読み、奴隷制がハムとカナンと彼らの子孫に対する呪いとして神によって制定されていないと言うことは、馬鹿げたことではないですか」と読者に問うてもいる。カナンの父ハムが酔って裸でいた父ノアを見たのに対して、他の兄弟たちは着物で父の裸を被って見なかったために、ノアが酔いから醒めたとき、「カナンは呪われよ。彼は僕の僕となってその兄弟に仕えよ」と言ったというくだりである。奴隷所有者たちは、「ハムの呪いの一部」として「彼が黒人になったのだ」とし、南部の牧師たちもこの聖書の話をくり返し語ったというが（フィンケルマン 三二）、『アント・フィリス』でも同様の論理で奴隷制が正当化されているのである。

『アンクル・トム』には、教会にでかけていったセント・クレアの妻マリーが「社会における秩序や区別がどのようにして神から生まれたかを示した」という説教に感銘を受け、聖書が奴隷保有者の「味方」であることを再認識したと語るシーンがある。そのような妻に対して夫は、奴隷制は南部人の「便宜と利益」のためであり、「奴隷資産が市場で売れない商品」になれば、聖書の教えをまったく別に解釈するのではないかと答えるが、『アント・フィリス』では、マリーが「すばらしい」と呼ぶ説教の論理に終始一貫しているといえるだろう。

たとえば、ヴァージニアの奴隷保有者ウェストンの息子アーサーは、勉学中のイェール大学で奴隷制の是非をめぐる論争に加わり、「聖書には主人と奴隷を規定する規則があるが、奴隷を解放すべき命令はどこにもないし、奴隷を保有することの罪についても規定されていない」と主張している。さらには、物語の語り手が、

十字架を背負ってカルヴァリの丘を登るイエスを手伝わされたクレネ人のサイモンが黒人であったとして、奴隷制がキリスト教の定めた制度であるかのような積極的な解釈を示している。

もちろん、奴隷制擁護論は、聖書の解釈を正当化しただけでは成立せず、法律的な擁護があつて可能になるものである。チェスナットの日記には、大ブランテーションの長として君臨していた義父が「強力なアメリカ合衆国政府の賛助なしには奴隷制が一日たりとも存続できなかった」とくり返し述べ、国が奴隷所有者に与えた権力に固執する様子が記録されている（二四一、二四九、三七七）。一八〇一年のトマス・ジェファソンの大統領就任から、一八六一年のアブラハム・リンカーンの就任までの六十年間、奴隷所有者たちが政府をすべて支配できた事実を考えれば（フィンケルマン 二）、チェスナットの義父の発言は当然でもあろう。この六十年の間に大統領になった十四人のうち、奴隷制に公然と反対したのはジョン・クウインシー・アダムズ一人であったが、一期のみの任期中には、大きな変化をもたらすことは何もできなかったのである（二）。

『アンクル・トム』に登場する混血奴隷のジョージ・ハリスは、カナダへの逃避行中、「国の法律を犯す」との恐ろしさを口にする友人に対して、自分たちを「押し潰し、押さえつけるだけ」の「国や法律」は自分たちのものではないと答え、逆に「七月四日にくり返される独立宣言の演説」の意味を問うている。ジョージの問いは、黒人指導者のダグラスが一八五二年の七月四日にロチェスターで白人の聴衆を前に行った演説に酷似しているが（小林 五五〇―六〇）、アメリカの黒人奴隷たちは、「アメリカ・インディアン」同様、「すべての人間の平等」を謳い、「生命、自由、幸福の追求」を基本的人権とする独立宣言の理想から、当初より疎外されていたことは記憶されるべきであらう。

だが、この問題に対するイーストマンの回答はじつに明快である。黒人奴隷は、自ら「生命、自由、幸福の追求」を求めるよりは、南部の奴隷主のもとで暮らす方が幸福だというのがその回答である。このことはおもにスーザンという逃亡奴隷のエピソードで説明されていて、「奴隷制廃止論者にそのかされて」逃亡し、北部で自由の身となって働くが、安い賃金で酷使されて「幸せになれず」、「親切な」南部人の援助で奴隷に戻ったと記述されている。この事例の背景にあるのは、どこでも貧しい人はいるが、南部ではそれが黒人奴隷で、彼らは「親切に世話を受け」「法律によって概して人間的に誠実に取り扱われ」、北部で働く貧しいアイルランド移民などより幸せだ、という主張にほかならない。

ウィリアム・グレイソンは、「反アンクル・トム長詩」の『雇われ人と奴隷』において、奴隷たちは「主人」に守られて、自由な貧しい労働者が直面する「危険を逃れている」(四五)と主張しているが、イーストマンも同様の論理で奴隷制を擁護しているのである。このような論調は、当時の奴隷制擁護論の基調を成すものであったが、これに対してダグラスが、「アイルランド人はぼろを着ているかもしれないが奴隷ではなく、つねに自分自身の身体の主人だ」(二六九)と反論していたことは想起されるべきであろう。

奴隷制が奴隷たちのためによいという論理の前提となっているのは、彼らが白人より「劣っている」という偏見である。『アント・フィリス』では、「黒んぼは、どうやったって、白人のようにはなれねえです、誘惑に勝てねえです」とフィリスの夫バッカスに言わせ、黒人が人種として「劣っている」という前提ですべての論理が進められている。フィリス自身、「頭のよい、威厳のある」女性とされるが、その優越性は、白人の血が混じっていることに起因していることが明示されている。フィリスはその身をもって、白人男性の女性奴隷へ

の性的虐待を証明しているのだが、そのことはまったく無視されているのである。

作者のおもな代弁者として奴隷制の正当性を訴えるアーサーは、「奴隷たちは法律で『財産』と認められている」と言う。アメリカ憲法は、たしかに、国会代表権や逃亡奴隷などの条項から奴隷制を容認していると読むことができ、とくに奴隷貿易の条項における「輸入」という語は、「輸入される物」すなわち「財産」と解釈することも可能である（ダッドレイ 二二一—二六）。ヴァージニアの奴隷法が、「輸入されたすべての人を奴隷とする」旨を規定していたことを考えれば（二二四）、アーサーの主張はより「信憑性」を帯びるかもしれない。だが、フィリスが彼の乳母であること自体、彼は「物」によってその精神を陶冶されたことになるだろう。

ジェファソンは、独立宣言を起草した数年後にその精神に反する奴隷制擁護の議論を始めたとみられる（フインケルマン 二〇）。『ヴァージニア覚書』では、実際的必要性、人種問題などの観点から、アフリカ人を引き続き奴隷とすることを正当化するような論理を展開しているが、十九世紀の奴隷制擁護論者は、ジェファソンが着手した論理を発展させ、それをさらに精巧に築きあげたともいわれている（二〇）。とりわけ、「推理力は白人に比べてかなり劣っており、想像力は鈍く、下品で異常である」（ジェファソン 一四六）と黒人を分析するくだりは、奴隷制擁護論の鍵が、結局は当時の人種の偏見にあったのではないか（フインケルマン 三九）という確証を強めることにもなる。黒人たちがもし「劣っている」とすれば、アメリカでの悲惨な境遇ゆえだという視点が、ジェファソンにもなかったことは、つけ加えておかなければならない（明石 八九）。イーストマンは、黒人奴隷が「劣っている」ゆえに、「親切で寛容な心をもった真の紳士」であるウェスト

ンのような奴隷主のもとで暮らすことが幸せであるという論理をつらぬき、親子離散というような残酷なことは、「きわめてまれなこと」としている。ウェストンは裕福な農園主であるが、その富が奴隷たちの犠牲によって築かれているという視点は無い。奴隷制が金銭との関係で論じられるのは、子どもが売られた「まれな」例について言及する場合のみである。

だが、「序文」には、南部では奴隷が必要であり、「悪ではあるがなくてはやっていけない」とある。奴隷制は結局のところ、セント・クレアが主張するように、南部の「便宜と利益」のためだということを、イーストマン自身、認めていたともいえるだろう。ウェストンも「奴隷制の悪」を認め、奴隷たちの利益になるならばすべての男女が自由になるのを見たいとも言うが、深南部では「黒人だけが労働できる」ゆえに奴隷制廃止は無理だと結論する。ジェファソンの『覚書』における主張と同様に（二八六）、奴隷制が奴隷のみならず奴隷主にも「呪い」となることを指摘しながらも、暑い深南部では黒人を働かせることが必要だととらえている。「親切的な」農園主に論理の破綻があるのは明白であろう。だが、彼はその論理を、連邦政府を作った父祖に倣ったとさえ明言しているのである。

ヴァージニアの『サザン・リタリー・メッセンジャー』誌の一八五六年十月号には、文学が奴隷制擁護の「もっとも強力な武器」になると主張し、南部の作家に奴隷制を正当化し、南部の立場を守る文学を書くことを「義務」とするような記事が掲載されている（ガーディナー 三二四）。ジェファソンの考えを踏襲し、南部の制度を擁護する小説を書いたイーストマンは、ヴァージニア人としての「義務」をいち早く遂行した作家だったといえるだろう。

4 南部女性によるストーリー批判に潜むもの

奴隷制の悪を認め、自由の重要性を認めながら奴隷制を擁護するイーストマンには、自らの詭弁に気づいているような節がみえるが、ストーリーへの怒りを書く彼女にはためらいがない。きわめて感情的に彼女の描いた人物を否定するばかりでなく、作家自身へも激しい侮蔑の言葉を放っている。たとえば、「地獄のような」農園から策略をめぐるして脱走する混血奴隷のキャシーを「もっとも恥ずべき人物」と呼び、その「墮落」した性格に読者が「同情」を求められているとして異を唱えている。トムが改宗させたのにも関わらず、キャシーが主人の金品を盗んで逃亡し、嘘をつくことをクリスチャンにあらずと断罪している。「冷酷な」主人に復讐し、自らも死ぬことばかりを考えていたキャシーが脱走を企てるのは、自分同様の運命にある少女に対して母のような愛情を抱くためであり、そこには母親の力で社会を変えることができるというストーリーの主張が託されているのだが、イーストマンはそのすべてを否定しているのである。

だが、イーストマンがキャシーを強く否定する裏には、さらに重要な問題が隠されていると見るべきだろう。その一つは、キャシーの脱走に女の力が結集され、それが成功することに、ストーリーの政治的メッセージが集約されている点である。『アント・フィリス』では、奴隷制廃止論者は、「神の命令をそらし、自然の法則や国の法律を見くだし、奴隷たちの道に茨を撒き散らす」と攻撃されているが、それがストーリーのように女性となるとさらに舌鋒は鋭くなる。女性が「政治的に」発言することに異を唱え、聖書の「ペテロへの第一の手紙」の言

葉を引いて、妻の夫への服従が、黒人の主人への服従と同様、摂理であると説いているからである。奴隷制廃止を標榜する新聞に寄稿するような女性は、バックスのような男性にも見合わないと侮辱している。バックスがフィリスの夫であるばかりか、誘惑に弱い「劣った」黒人として描かれていることを思えば、その侮辱がいかに感情的なものであったかは言うまでもない。女性が奴隷制廃止を訴えることは、女権運動に加わることに同様に、「礼節の觀念がまったくない」証とみなされているのである。

イーストマン自身、奴隷制を擁護し、政治的に発言をしているにも関わらず、ストーリーの同様の行為が、なぜ礼節に反するのであるのか。南部女性がこのような考えを抱くには、ヴィクトリア朝的女性觀が深く南部に浸透していたことに加え、南部の男性作家たちが自著や雑誌などで展開した洗脳活動の影響も少なからずあったようである。彼らは、北部で女権運動が盛んになると、それが南部の家父長制体制を揺るがすと考え、伝統的な南部女性の規範に反する考えに機先を制したという。⁽⁵⁾「女性の地位向上を要求した不幸な女性がいかに侮蔑され、後ろ指を指されてきたか」という類の警告をだし続けたのである。その結果女性たちは、女性の権利に関するいかなる考えも拒絶することで「女性らしい」と賞賛され、拒絶しないことの危険性を熱心に説くようになったという。

そのことは、奴隷制廃止論に対しても同様で、南部女性は、「真の女性」として、そのような考えを支持するような「危険に誘惑されない」ことで賞賛されていたのである。奴隷制廃止論は、英国女性の間でいち早く支持されたが、「英知あるアメリカの母親」ならば、廃止論を支持して「女性の使命」を「違えた」英国女性やストーリーに、「哀れみの目を向けることができる」と鼓舞されてもいたのである。『ピカユーン』紙に掲載され

た南部女性の『アングル・トム』批判については先に言及したが、この批判も『アント・フィリス』におけるストーリー攻撃も、当時の南部における男性作家などによる女性への思想統制のコンテクストで考えれば、その意味がより明らかになる。奴隷制を擁護することはまぎれもない政治活動であるが、その意見が男性の意に添ったものであれば、南部女性の礼節に叶うことであろう。

イーストマンが、キャシーを「もっとも恥ずべき人物」として否定するもう一つの重要な理由は、彼女が性の奴隷であり、白人の血が多く混ざった彼女の身体と、何人もの白人男性と性的関係をもたされてきた彼女の経歴に、奴隷制の最大のタブーが隠されているためだと思われる。ストーリーは、黒人女性がアメリカの産業資本主義経済のシステムのなかで、奴隷資産を増やす機械のように扱われていることに異を唱え、白人男性による性的迫害をキャシーやプルーなどの女性奴隷によって示しているが、それが性的純粋さをことさら求められていた南部女性には、攻撃しなければならぬポイントになったのであろう。先の『ピカユーン』紙の批評に、ストーリーが「好色の想像力を働かせた」とあり、イーストマンがキャシーを「墮落した」と呼んでいるところに、南部女性がもっとも強い関心をもちながら、しかし最終的には避けていた性の問題が潜んでいるといえるだろう。

同じ南部女性でも、農園主夫人として奴隷と間近に生活していたチエスナットは、その日記で、奴隷制を「非道で邪悪な酷いシステム」（二一九）と呼び、ストーリーがキャシーの主人レグリーを独身にしたことで「奴隷制のもっとも辛い部分を批判しなかった」（二六八）と糾弾している。その部分とは、南部の男性が妻と「妾」とを一つの家に住ませ、どの家庭にも白人の子どもたちと瓜二つの混血の子どもたちがいるという、白人男

性の奴隷女性との性行為の横行である。南部出身の活動家アンジェリーナ・グリムケは、一八三六年『クリスチャンの南部女性への訴え』を北部で出版し、奴隷制の実態を「語ること」によって解決への糸口が見つかるかと訴えていたが(二〇)、夫の墮落に悩んでいた妻たちは、農園の経済と絡んだ性の問題に「沈黙」を強いられていたのだろう。チェスナットの日記による告発さえ、それが変更や削除なく出版されるのに百年を要したことを思えば、奴隷制が生みだした性の問題を公にすることの難しさがいやがうえにも浮かびあがる。そして、奴隷農園の実態に日々直面することなかった南部女性には、チェスナットが描写の生ぬるさを批判する箇所でも、ストーリーが「好色の想像力を働かせて」書いた「墮落した」話と思えた(思わされていた)のだろう。だが、男性の「悪」を告発したチェスナットでさえ、奴隷女性への同情はなく、「女性の身分が低いほど墮落している」(二二)とみなしていたことはつけ加えなければならない。

奴隷の性は、男女とも所有者によって支配され、奴隷同士で関係を強要されることがあっただけでなく、女性奴隷は主人の性の要求に屈せざるを得なかったという(クリントン 二〇二)。奴隷同士の強要された婚姻も、主人の女性奴隷に対する性行為の強要も、主人の絶対的権力を示すものであるが、その結果として、子どもが生まれれば奴隷資産を増やすことになり、主人の経済が潤うことになる。ストーリーは奴隷資産を増やすために投機師に「飼われる」女性の悲劇を描いてもいるが、とくに奴隷貿易が禁止された後、主人の性的放縱の結果生まれた子どもといえども重要な資産になったのである(ジョーダン・レイク 一五五―五六)。

ジェファソンも、大統領選を闘う時点で二百人を超える奴隷の所有者であり、その数を次第に増やしていたが、「黒人の妾」と「混血の私生児」がいると、新聞などでとりざたされていた(クリントン 二二七)。この

噂は、現代までもち越されることになり、その真偽を追及した本なども多数出版されている。一九九八年にはイギリスの科学雑誌『ネイチャー』に、ジェファソンには黒人女性との間に子どもがいたとするDNA鑑定の結果が発表され、それに対して、ジェファソンの子孫などで構成するヴァージニアのモンティチェロ協会は疑わしいとする声明をだしてもいる（『トマス』 一一二）。だが、ここで確認すべきもっとも重要なことは、彼の農園の奴隷人口が「着実に白くなっていった」ということであろう（クリントン 二一八）。

ある奴隷制廃止論者は、白人男性の奴隷女性への性的迫害を批判して、南北戦争前の南部を「巨大なる売春宿」と呼んだという（ジョーダン・レイク 一四六）。その象徴が、性的迫害の歴史をその白い身体をもって示すキャシーのような奴隷の増加である。キャサリン・クリントンは、そのような混血奴隷に対する奴隷廃止論者の非難に対抗するために、「白人と黒人の家族的な関係の実証的象徴」として、乳母像が創造された主張している（二〇二）。南北戦争前の南部の歴史的資料には、奴隷所有者から特別の位置を与えられた、小説に描かれたような乳母像がみあたらないとすれば（二〇一）、それが明確な意図をもって作りあげられたイメージと考える方が自然であろう。

『アント・フィリス』では、人物設定やその描写など『アンクル・トム』の小説作法を模倣しつつ、対照的な主張に終始しているが、フィリスは、キャシーの対極にいる混血奴隷として描かれ、その姿に聖なる乳母のイメージが与えられている。フィリスは、逃亡して自由になることをクリスチャンにあるまじき窃盗行為として否定するばかりか、女主人を看取り、彼女に託されたアーサーを美しい賛美歌を歌って育て、その全生涯が聖書の教えの見本とみなされてもいる。「もっとも価値ある召使」として「心地よい小屋」も与えられ、その

「謙虚さ」ゆえに「聖人」にまで譬えられることで、彼女は人種と階級の壁を越えた固い絆を主人の家族と結んでいるかのようである。白人女性に求められた理想を混血の乳母として完璧に具現するのだが、むしろそれで階級と人種の壁が越えられるわけではない。彼女は自分の子どもより主人の子どもを優先し、彼らに階級の違いを教えることで好ましいとされるばかりか、奴隷の身もあの世でなければ贖罪されないからだ。ミンローズ・グウィンは、『アント・フィリス』では「異人種女性の絆の力」が男性に対抗する点で『アンクル・トム』と共通していると述べているが（四三）、女性が人種と階級を越えた絆を結んでいるかのように見せかけるこそが、奴隷制を擁護し、ストーリーに対抗する戦略であったというべきだろう。ストーリーは子どもを手放さなければならぬ奴隷の母親を描いて奴隷制を批判したが、イーストマンは、主人の子どもから離れない、白人に都合のよい奴隷の母親を描いて奴隷制を擁護したといえるだろう（ジョーダン・レイク 一四六）。

しかし、「黒き胸で授乳する」姿に聖なるイメージを付し、白人との家族的関係を強調したとしても、その姿が当初の意図に反して、性的な要素を喚起していたこともまた否めない（クリントン 二〇二）。南北戦争前の南部を旅行したある英国人は、南部男性の「上品ぶった感じと性的放縦さが不愉快に混じった」性格を奴隷制の影響の一つとみなし、その原因を若年期の不道德な性交渉に求めている（二〇八）。「乳母が授乳し、温かい身体で白人の要求に応える」姿は、白人男性の奴隷女性への性的迫害を否が応でも暗示する（二〇二）。フィリスが、主人への服従を美德とし、「奴隷らしい弱さ」をもつ女性で、十二人の子どもの母親であるということは、この暗示を深める一つの要因とはなろう。

ジェファソンは、『覚書』において、「奴隷の完全解放」（一六九）を望む姿勢をみせる一方、人種的混合を

避けるべきだと提案している。「白人の根強い偏見、黒人が蒙った不正の記憶」などから、奴隷がすぐに解放されたら、白人・黒人のいずれかが絶滅するまで終ることのない「社会的動乱」（一四五）が起きるとして、解放を先延ばしにする姿勢をつらぬいている。イーストマンが、ストーリーなど奴隷制廃止論者を糾弾するその筆致には、ジェファソンが予測した人種的混合や社会的動乱への恐怖がたしかに見受けられる。彼女は奴隷が解放されるならば、黒人を他の場所に移すかたちで実施されると予測しながらも、奴隷制廃止論者と人種的混合の推進者を同一視し、きわめて感情的に反対している。その恐怖は、白人優越主義で武装しているゆえに、いっそう拭えないものであったに違いない。白人男性と奴隷女性との関係によって奴隷が増え続けている状況を考えれば、その恐怖は白人男性のそれをはるかに超えたものではあったろう。アメリカ史上最大規模ともいわれる黒人奴隷ナット・ターナーの反乱は、言うまでもなくヴァージニアで起きたことである。

5 黒人奴隷とアメリカ・インディアン

奴隷制廃止を標榜していた週刊宗教新聞『インディペンダント』は、一八五二年十月二十八日付けで早くも『アント・フィリス』を書評し、イーストマンが描くほど奴隷が幸せならば「その創作者はなぜ急いで自分たちの子どもを奴隷所有者に売らないのか」と皮肉っている。ストーリーは、自分の子どもを亡くしたことで子どもを売られる奴隷女性への同情を深めたといわれ（ヘドリック〈1〉一九三）、『アンクル・トム』にはその気持ちがつらぬかれているが、母親としての主観的な意見は、『アント・フィリス』の結末でも表明されている。

イーストマンは、『私の』子どもは黒人と別の学校で教育してもらいたい」と、「人種的混合への絶対反対」を、激しい口調で訴えているのである。

イーストマンは、フロンティアにおける生活経験から、先住民の言語や文化に精通する民族学者でもあり、白人の先住民への差別に対する怒りをその著書で表明していた（『ピクチャー』一）。一八四九年に出版した『ダクター フォートスネリング周辺のスー族の生活と伝説』でも、白人の侵略に批判的な態度をもってインディアン文化や伝説を描いていた。なかでも母として妻として困難な立場にあるインディアンの女性への同情は深く、「彼女たちは夫の奴隷である」（四一）と書いていることは特筆すべきだろう。先住民に対するこのような同情的な態度は、『アント・フィリス』でもみられ、先住民が白人に「不正に扱われた」歴史がアーサーの口をとおして語られている。だが問題は、イーストマンが、なぜ黒人への差別には先住民に対するほど敏感になれなかったか、ということにはかならない。

この問題を解く鍵の一つは、白人優越意識に根差した人種的混合への脅威にあるように思われる。イーストマンが人種的混合に「絶対反対」の姿勢をつらぬくのは、南部の奴隷問題が、先住民の場合のように「彼ら」の問題ではなく、混血奴隷の増加に示されているように、密接に「私たち」の問題であったからであろう。ジェファソンの『覚書』でも、黒人よりもインディアンにはるかに好意的であるが、その理由の一つは、インディアンの人口が白人の略奪による「領地の減少」（一〇二）などから激減し、もはや彼らが白人の脅威ではなくなったことにあるといえるだろう。

『アンクル・トム』にしても、逃亡に成功した奴隷ジョージをリベリアに行かせ、黒人と白人との共存の道

は模索されてはいない。ストーリーの真意は、宗教的な理想をリベリアで実現することにあつたともいわれ（小林五五九）、一八五三年には人種隔離の考えを訂正したともいわれているが、彼女に人種偏見がなかったと言いがたい（ゴセット 二九四―九五）。一方、イーストマンも、奴隷制に対する考えを変えるのは、南北戦争中だという（『ピクチャー』一）。フィリスが人種と階級の壁を越えた家族的関係の象徴として描かれたとすれば、それが真の意味で追求され始めるには、南北戦争という高い代償を支払わなければならなかったということであろう。

注

- (1) 引用部分の邦訳は、『アンクル・トム』については小林憲二監訳を参照。その他についてはすべて拙訳。
- (2) 『アンクル・トム』に関する当時の新聞・雑誌記事については、すべてステイブン・レイルトン監督の『マルチメディア・アーカイブ』を参照。
- (3) ヘンリー・ジェイムズは、九歳のころ、ニューヨークで「アンクル・トム・エピソード」に遭遇するが、当時の様子を後年、自伝『少年と他の人びと』で回想している。「私たちはあのころ、大きな熱意をもって、ストーリー夫人の小説の世界のなかで生き、動きまわっていた」と『アンクル・トム』が本の力を超える影響力を発揮していたことを述べるばかりでなく、ナショナル劇場などで上演された『アンクル・トム』劇についても詳細に評している（九二―九四）。
- (4) 『アンクル・トム』を所持していた咎で十年の禁固刑を受けた自由黒人は、二年後、アメリカを出国するという条件つきでメリーランド州知事からの釈放許可を得て、ただちにカナダに行っている（ゴセット 二二一）。
- (5) 男性作家が南部の女性観に及ぼした影響については、マリー・ワイナー（六五―六八）を参照。

引用文献

- Adams, John R. *Harriet Beecher Stowe*. Boston: Twayne, 1963.
- Chesnut, Mary Boykin. *Mary Chesnut's Civil War*. Ed. C. Vann Woodward. New Haven: Yale UP, 1981.
- Clinton, Catherine. *The Plantation Mistress: Woman's World in the Old South*. New York: Pantheon, 1982.
- Douglass, Frederick. *Frederick Douglass: Selected Speeches and Writings*. Ed. Philip S. Foner. Chicago: Lawrence Hill, 1999.
- Dudley, William, ed. *Slavery: Opposing Viewpoints*. San Diego: Greenhaven, 1992.
- Eastman, Mary H. 〈1〉 *Aunt Phillis's Cabin; or, Southern Life As It Is*. 1852. Upper Saddle River, NJ: Gregg, 1968.
- . 〈2〉 *Dancoloh: Life and Legends of the Sioux around Fort Snelling*. 1849. United States: Kessinger, n.d.
- Finkelman, Paul. *Defending Slavery: Proslavery Thought in the Old South. A Brief History with Documents*. Boston: Bedford/St. Martin's, 2003.
- F. C. S. "Mary Eastman." Eastman 〈1〉 n.pag.
- Furnas, J. C. *Goodbye to Uncle Tom*. New York: William Sloane Associates, 1956.
- Gardiner, Jane. "The Assault upon Uncle Tom: Attempts of Pro-Slavery Novelists to Answer *Uncle Tom's Cabin*, 1852–1860." *Southern Humanities Review* 12 (1978): 313–24.
- Gossett, Thomas F. *Uncle Tom's Cabin and American Culture*. Dallas: Southern Methodist UP, 1985.
- Grayson, William J. *The Hiringling and the Slave, Chicora, and Other Poems*. 1956. Northstratford, NH: Ayer, 2000.
- Grimké, Angelina. *An Appeal to the Christian Women of the South*. 1836. United States: Kessinger, n.d.
- Gwin, Minrose C. *Black and White Women of the Old South: The Peculiar Sisterhood in American Literature*. Knoxville: U of Tennessee P, 1985.

- Harrold, Stanley. *Gamaliel Bailey and Antislavery Union*. Kent: Kent State UP, 1986.
- Hedrick, Joan D. <1> *Harriet Beecher Stowe: A Life*. New York: Oxford UP, 1994.
- , ed. <2> *The Oxford Harriet Beecher Stowe Reader*. New York: Oxford UP, 1999.
- Hirsh, Stephen A. "Uncle Tomitudes: The Popular Reaction to Uncle Tom's Cabin." *Studies in the American Renaissance* (1978): 303–30.
- James, Henry. *Autobiography: A Small Boy and Others. Notes of a Son and Brother and The Middle Years*. Princeton: Princeton UP, 1983.
- Jefferson, Thomas. *Notes on the State of Virginia*. 1785. New York: Penguin, 1999.
- Jordan-Lake, Joyce (Joy) Lyn. *Fighting Fire with Fiction: Martyrfoal Representations and the Image of the Female Christ in Anti-Uncle Tom's Cabin Novels*. Diss. Tufts U, 2001. Ann Arbor: UMI, 2006. 3004800.
- Kirkham, E. Bruce. *The Building of Uncle Tom's Cabin*. Knoxville: U of Tennessee P, 1977.
- Papashvily, Hellen Waite. *All the Happy Endings: A Study of the Domestic Novel in America, the Women Who Wrote It, the Women Who Read It, in the Nineteenth Century*. New York: Harper, 1956.
- Picture History-Mary Henderson Eastman*. 3 June 2006 <www.picturehistory.com/find/p/21383/mcms.html>.
- Railton, Stephen. *Uncle Tom's Cabin and American Culture: A Multi-Media Archive*. 25 June 2006 <<http://www.iath.virginia.edu/utrc/>>.
- Stamp, Kenneth M. *The Peculiar Institution: Slavery in the Ante-Bellum South*. New York: Vintage, 1989.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin; or, Life among the Lowly*. 1852. Ed. Elizabeth Ammons. New York: Norton, 1994. 『トム・ウェルの小屋』小林憲二監訳 明石書店 一九九八年
- Thomas Jefferson-Sally Hemings DNA Study*. 9 Oct. 2006 <www.angelfire.com/ya/TJTruth>.
- Weiner, Marti F. *Mistresses and Slaves: Plantation Women in South Carolina, 1830–80*. Urbana: U of Illinois P, 1998.
- Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1820–1860." *American Quarterly* 18 (1966): 154–74.
- Wilson, Forrest. *Crusader in Crinoline: The Life of Harriet Beecher Stowe*. Philadelphia: Lippincott, 1941.

明石紀雄 『トマス・ジェファソンと「自由帝国」の理念 アメリカ合衆国建国史序説』 ミネルヴァ書房 一九九九年
小林憲二 「『アンクル・トムの小屋』の再評価と位置付け」『アンクル・トムの小屋』五四〇—九四頁